

# ランキング本で見せる多様な指標が大学選びに投じた一石

朝日新聞出版「大学ランキング」編集長

## 中村 正史

なかむら・まさし

1981年早稲田大学政治経済学部卒業。長年、教育・大学問題の取材に携わり、「週刊朝日」記者時代の1994年に「大学ランキング」を企画し創刊。「週刊朝日」副編集長、「AERA」誌面委員、教育・ジュニア編集部長などを経て現在、教育関連媒体を統括。



### 企業、社会の変化に伴い父親の影響が増す

一方、親の意識は受験生と同じように変わってきている。「大学の価値は入試難易度だけではない」という意識は子どもよりもむしろ親のほうが強い。

最近聞いた例では、立命館アジア太平洋大学（APU）と、国際教育で知られる首都圏の難関大学を受験し、両方に受かった受験生は、APUを選んだ。APUのほうが入試難易度は低いが、父親がこちらを薦めた。

APUは学生のほぼ半分を留学生が占める国際色豊かな大学だ。学内の企業説明会には、日本の代表的な商社やメーカー、銀行などが参加する。企業のグローバル化に伴って就職状況がいい。そうした情報を父親が経済誌などで知り、子どもに薦めたのだ。

1990年代前半までは、学歴の差は入試難易度の差だった。入試難易度が低い大学をあえて選ぶ者はいなかったし、入試難易度の高い大学を卒業すれば有名企業に就職でき、安定した人生が約束された。だが、今は有名企業でも先行きはわからない。

企業が求める能力は学力ではない。もちろん基礎的な学力は必要だが、「いくつかのものを組み合わせる」「コミュニケーションを通じて多様な文化を受け入れる」「自分の頭で考えて発想問題を解決できる」といった能力に長けた人材が求められる。そこでは入試難易度

は意味を持たない。

かつての企業は、入試難易度が採用時の評価の基準であり、大学の4年間でその学生が何をしてきたかはほとんど見ていなかった。しかし今や、企業側は入社後、人材を育成する余裕がなくなり、大学の教育に期待するようになった。特に父親はこれらを企業社会の中で日々実感しており、将来のことを考えて大学選びのアドバイスを

する。今の受験生は大学選びも会社選びも親の強い影響下にある。それは、中学校を受験させる家庭が増えたこととも関係している。中学受験の学校選びはほとんど親が決め、とりわけ父親の関与は増しており、受験する中学校や塾の説明会でも父親の姿が非常にめだつ。そして、大学受験の時も同様に親が積極的にかかわろうとする。最近では親子対象の就活セミナーに父親が同行するケースもある。子どもの進路に積極的にコミットしようとする親の意識の変化は、悪いことではない。

### 大学との対話を当然視する意識

2009年版から「大学ランキング」で、保護者会への参加者数に着目した「保護者会ランキング」を掲載している。多くの大学は、保護者会で成績や就職の相談を受けるので、このランキングは、大学と保護者がどの程度コミュニケーションを図っているのを見る1つの指標と言えるだろう。

図表は、2013年版のランキングだ。学生の数の多さ、国公立の別は関係ないことがわかる。毎年2位以下は変動するが、ここ4年間は関西大学の1位は不動だ。親は高校まで、いろいろな形で子どもを介して学校とのコミュニケーションを取っている。最近の親

は大学もそのような関係の延長線上に置いて見ており、大学はその期待に応える必要がある。保護者会は、大学の今の姿と強みを発信し、参加者を通して認知度とイメージを向上させる広報活動の機会でもある。

### データの読み解き方も解説する広報が必要

各大学とも学生の就職支援に努めているが、最終的に就職を左右するのは、その大学でどんな教育を受け、何を学んだかである。だから、大学は情報をオープンにして、教育の中身としくみを発信するべきだ。

受験生にとって、大学の就職状況はとてつもなく気になり、卒業生の数に対する就職者の数、どんな企業に何人就職したかに注目する。一方、親は、当事者である子どもがその大学で何をしていたのかを重視する。留学したいと思っているのであれば、交換留学などの制度がどの程度整備されているのかを知りたい。研究者になりたいという希望をかなえるために、その大学はどの分野で評価が高く、どんな専門家がいて、どんな内容の講義や研究室があるのかを知りたい。

大学側は、各種の数値データやカリキュラムを含めた教育内容はもちろん、少人数制の授業や全学横断的な科目など、どう教育のしくみを持っているのかも積極的に発信すべきである。

各大学の大学案内やウェブサイトでは、学部やゼミが横並びで平等で紹介されており、その大学は何か強みでどこが魅力的なのかわからない。

情報公表が大学に義務付けら

れたが、「大学ランキング」を通して接する限り、現場の対応はあまり変わらない。調査票を送っても毎年「非公開」という大学がある。大学は情報公開すべきだという考えから、答えてもらえなかった質問項目数に着目した「非公開ランキング」を掲載したことがある。数値データなどの基本的な情報を公開していない大学は、受験生の目には、知られたいくない事情がある「怪しい大学」に映る。情報非公開のデメリットは、大学が考える以上に大きいと肝に銘ずるべきである。

もちろん、情報発信だけでなく、データの裏付けとなる情報や解説の必要もあるだろう。例えば、修業年限での卒業率が低い大学がダメとは一概に言えない。厳しい基準を設けている大学もあるからだ。そういう読み解き方は、大学が解説する必要がある。

いずれにしても、教育の中身としくみを受験生だけでなく親にも理解してもらい、それに共感してもらえない限り、選ばれる大学にはならない。

脱偏差値、脱大学神話を掲げてさまざまな視点から大学情報を提供している「大学ランキング」。その編集長である中村氏が、大学選びに対する保護者の意識の変化と、それをふまえた大学の情報提供、情報支援のあるべき姿について語る。

### 創刊のコンセプトは「偏差値に代わる指標」

「大学ランキング」の創刊は1994年で、2013年に出る号がちょうど20号になる。今でこそ「偏差値だけを重視しない」という声を耳にするようになったが、創刊当時は、大学を評価する指標は偏差値しかなかった。創刊号の表紙には、「入学偏差値と大学神話に代わる新たな指標を求めて」というコンセプトを入れた。当時、教員のレベル、教育の内容、補助金の額など、どの分野でも東京大学が一番であるという大学神話が浸透していた。

「週刊朝日」の記者時代、大学を取材してみると実際にはそれらが間違いであることに気付かされた。分野ごとの研究や授業の中身も、どれもが東京大学が1番というわけではない。入試難易度とは必ずしも一致しない大学ごとの強みがある。

そこで、多様な視点から大学を評価する「大学ランキング」を作った。入試難易度はあくまでも大学を評価するときの一つの指標にすぎず、ほかにもさまざまな指標があることを訴えてきた。

その結果、大学を入試難易度だけで判断しない受験生が増えてきたのは事実である。「大学ランキング」が高校の進路指導教員に、生徒は何をもって志望校を選んでいるのかを聞いたアンケート調査によると、興味・関心がある学問が学べるのが最も多く1位だった。偏差値が高い、もしくは偏差値が自分の学力に合っているは5、6位。偏差値という呪縛がなくなり、高校生の意識が変わりつつあることを実感する。その一方で高校の進路指導教員、大学の学長、事務局長を対象にしたアンケート調査で、意識が一番変わらないのは高校教員であることがわかった。

図表 保護者会への参加者数ランキング

順位	大学	参加者数(人)
1	関西大学	5,512
2	東海大学	4,549
3	東京農業大学	3,581
4	広島大学	3,500
5	専修大学	3,383
6	福岡大学	3,064
7	立命館大学	3,011
8	上智大学	2,651
9	日本大学	2,568
10	中京大学	2,561
11	明治大学	2,547
12	金沢工業大学	1,878
13	芝浦工業大学	1,859
14	慶應義塾大学	1,806
15	日本文理大学	1,701
16	青山学院大学	1,683
17	近畿大学	1,672
18	中部大学	1,596

2011年1～12月の参加者数を集計  
朝日新聞出版「2013年版大学ランキング」(2012年4月)より